

はじめに

新型コロナウイルスが地球全体を委縮させているいま、期せずして第24期卒の穴澤公一氏から同窓会報「航跡」への原稿依頼があった。コロナ禍のために、依然として外出自粛が続く中、ラグビーとのかかわりもひと段落して区切りの良いところで、自分を振り返って見るつもりでお引き受けした。

選手や審判のとき

初めて私がラグビーボールに触れたのは城南高校に入学したときである。入部してすぐに後悔した。練習がきつかったからだ。1年の夏休み前に退部してしまった。夏休み中、こんなことで良いのか悩んだ。悩んだ末に再入部した。以後、ケガをしたとき以外、高校、大学それぞれのチームで練習を休んだことはなかった。実力はいずれの所属したラグビー部も強くはなかった。高校時代も公式戦は2回戦どまりだった。大学は東京教育大学だったが、やはり秋のリーグ戦で勝ち越したことは一度もなかった。それでもラグビーをやめる気持ちはさらさら無かった。ラグビーはプレーしているだけで楽しかった。試合が終わり、緊張感が解けると同時に来る、あの解放感が何とも言えない。こうして32歳まで選手を続けた。選手をしながら39歳まで審判も経験した。34歳から39歳まで、国際審判員の資格を得た。現在、我が国の国際審判員は10人を超えるが、当時は5人だった。国内で開催される国際試合は今ほど多くはなかったが、南半球から来征するクラブチームの試合を吹くことが多かった。また、今でも開催されている香港セブンス大会に1983年に派遣された。国際試合を経験して感じることは、ラグビー文化の違いだった。外国チームの選手はラグビーを楽しんでいる。試合中はそばに寄るのがこわいほど気持ちを集中させて闘うが、試合が終われば相手チームの選手と楽しそうに友情を交換する。ノーサイドの精神である。ラグビーは試合が終わったあと、アフターマッチファンクションと称する簡単な立食パーティを開く。そこには両チームの選手、コーチそしてレフリーが集まり、歓談する。そんなこともあってか、社会人になってからも、ほかのチームだった人たちとの交流がラグビーでは盛んである。

指導者、役員となって

私は埼玉県教育公務員として、公立高校の教員を中心に定年まで勤務した。最初の赴任地は県立浦和高校（通称：浦高）だった。ここに16年間お世話になった。浦高は私が赴任するまでラグビーを専門とする指導者はいなかった。しかし、過去には昭和34年に花園の大会に初出場し、そして今年は3回目の出場を果たし、元旦を花園ラグビー場で迎えた。その活躍ぶりはおおいにマスコミを賑わせた。

しかし、赴任当時のチームは15人そろうのがやっとの部だった。雌伏6年目にして新人

大会を優勝で飾れた。以後、私が異動するまで、埼玉県には 80 を越える高校チームがあったが、ベスト 4 から外れることはなかった。各種の大会で 7 回優勝したが、残念ながら花園に行くことはできなかった。

役員としては、前述したレフリー関係で日本ラグビー協会の審判委員長を仰せつかった。2002 年にタイで開催されたアジア大会では、アジア協会の審判委員長という立場で会議を招集し、アジア各国のレフリーのレベルアップを図った。

また、全国高等学校体育連盟ラグビー専門部長の役も仰せつかった。インターハイの実施責任者である。ちょうど私の任期中に大会が 80 回を迎え、記念大会となった。当時の文部大臣は町村信孝氏だった。彼は日比谷高校ラグビー部 B である。開会式終了後のキックオフをお願いしたところ、それにはどうしても母校のユニフォームを着たいという希望が強く、それにお応えした思い出が懐かしい。今年が 100 回を迎える記念大会であり、感慨深いものがある。

最後に、昨年 2019 ラグビーワールドカップが日本で開催されたが、その組織委員会の役員も仰せつかった。当時の森喜朗日本ラグビー協会会長から呼び出され、役員就任を依頼された。役職は「事務総長特別補佐」である。この役は二人が担当した。いま一人が平尾誠二さんだった。彼は就任当初は元気だったが、その後、会うたびに健康状態が悪化しているのがわかった。2015 ロンドン大会の視察も実現できなかった。彼が伏見工業高校、また同志社大学の選手時代に、花園ラグビー場で彼が出場した試合の審判をしたことを思い出す。

おわりに

昨年、城南高校ラグビー部は創部 70 周年のお祝いをした。ご存知のとおり、部はとっくの昔に廃部となっている。私たちの時のような田島更一郎という素晴らしい指導者もおらず、自分たちだけで工夫しながら練習を積んだ若手 B が、今でも集まって多摩川の河川敷や大学のグラウンドを借りてラグビーを楽しんでいる。その彼らが何とか 70 周年のお祝いをしたいという声を聞き、古手 B も賛同して開催する運びとなった。会場は城南高校 B が経営する「新橋亭」で、そのフロアが満杯になるぐらいの男女 B が集まった。こんな素晴らしい若手 B に心から感謝し、改めてラグビーのすばらしさを感じた次第である。

いま、すべての役職を離れ、これからは、いちラグビーファンとして、ゆっくりラグビーを楽しみたい。